



2013年9月8日～13日参加

専修大学 2年 茉那さん

8日の夜、シエムリアップ国際空港に到着した。飛行機を出るとそこはなんと滑走路。ついた瞬間驚いた。空港で駐在人を見つけ、今回ツアーで一緒になる他のメンバーを外で待っていた。空気はじめじめして虫がたくさん飛んでいる。ヤモリが壁にひっついているのをみたら、もうすでに1週間もカンボジアでやっていける自信を失っていた。バスで Ta Prom Hotel へ向かい、慣れないカンボジアで眠りについた。

9日、ホテルでの朝ごはんを食べて、アキラ地雷博物館へ行く前に CSHD



(Cambodian Self Help Demining) の事務所へ行った。そこではどのように地雷を撤去するのか、今までどれくらいの地雷を撤去してきたのかなどのお話を伺った。なかには女性の方もたくさんいて迷彩柄の服を身にまとっていた。そして

幸運にもイギリスにいるはずのアキラ氏にもお会いすることができた。

アキラ氏 (アキ・ラー) とは実際にポルポトによって教育され、ベトナム軍だった内の一人。10歳から20歳まで軍隊として多くの人を苦しめてきた。20歳の頃にシエムリアップに出かけると手足をないひとを見かけ、自分が埋めた地雷だと責任を感じ地雷撤去活動始めた。アキラ地雷博物館は実際に撤去した地雷、世界の地雷につい

てのデータがあり、とても勉強になる場所だった。地雷の問題はカンボジアだけではなく世界の問題だということ、地雷がどんなに恐ろしい兵器かが分かった。

地雷の勉強とともに学ぶことができたのはカンボジアの歴史についてだ。1975年からのポルポト政権。1998年のポルポトの死。これはたった15年前の出来事、つまり、カンボジアは平和になってから15年しかたっていない。そんな国へ私たちはいるんだ、と考えると信じられずとてもこわくなった。

お昼を食べて次は鬼一二三日本語教室。学校へ入ると壁一面に生徒が書いた習字が飾ってあった。建物は全く違うけれど、日本の小学校を思いださせた。生徒は日本語をととても上手に喋る。字も上手。さらにびっくりしたのはスピーチだった。ソーヘンくんがスピーチをしてくれたときは鳥肌が止まらなかった。日本語教室の生徒はみんな一生懸命夢に向かって日本語を勉強していて何人かは日本に留学すると嬉しそうに語ってくれた。鬼一二三先生の授業はとても面白くて生徒とも言葉が通じたのでとてもよい交流ができた。みんなは Face book をもっていたので交換して今でも連絡を取っている。



初日の最後は義足リハビリセンター。ここでは義足を作る過程やその後のリハビリの状況を見学した。2010年まではベルギーの支援があったが、それ以降はカンボジア自国だけで手足がないひとを支援している。サービスできる人数は減ってしまったと話していたが海外に頼るばかりではないんだな、という面を知れてよかったと同時に、カンボジアも頑張っているのだと感じた。

初日の夜ご飯はアプサラダンスを鑑賞しながらカンボジア料理を堪能した。今回初めてあったメンバーともお話ができ仲が深まった。

2日目10日の出来事。私たちはこの日の中学校訪問のためにクメール語で自己紹介を必死に練習してきた。一つ目の中学校は CMC コントライ夢中学校。学校に着い



た。周りは何にもない。山もなければ川もなくてただ地平線だけが広がっていた。さあいざ中学校へ。教室へはいるとあらゆる年代の子どもたちが汚れた制服を着てぎゅうぎゅうと椅子に座り、私たちを迎えてくれた。みんなは笑っている。

すごい笑顔で笑っている。男子やスポーツが好きな子たちは外でサッカーをしていた。女子はほとんど教室の中で折り紙をしていた。しかし言葉が通じない。いろんなことを教えてあげたかったけど言葉が通じない。それが本当につらかった。もっと何か準備をしてくれば良かったと後悔した。でも折り紙で鶴を作ってあげた時の喜んでくれた姿は言葉の壁を忘れさせてくれた。笑顔って一番だと思った。

そのあとは地雷被害者インタビューをした。みる限り、とても貧しい暮らしをしている人だった。それはもちろん働けないからだろう。そして中学校の子たちとは全く違い、あまりしゃべらない、笑顔が少なかった。その人自身も地雷を踏んで足をなくしてから人生が変わってしまったと言っていた。聞いているのがすごくつらかった。質問に答えるのもつらそうだと思っていたら私たちメンバーのひとりがこう聞いた。

『このようにインタビューされるときってどういった気持ちなんですか』と。そうするとにっこりしながらこう答えた。『嬉しいです。』そう言ってくれたときは私も嬉しくてにこっと笑顔を返した。

そして2校目のトゥールポンローみおつくし中学校。ここは1校目よりも田舎だった。地雷被害が多いバンテアイ・ミエンチャイ州で学校の門には日本の国旗とともに地雷を撤去して作られたと書かれた看板が立っていた。実際に地雷があったとか考えてしまうとこわくなる一方、日本の支援がこんなにも力になっているのだと肌で感じた。ここで学ぶ生徒もやはり笑顔が絶えなかった。学校があること、学校に通えること、当たり前と思ってはいけない、と思うばかりだった。

最後の地雷被害者インタビューは2人にした。一人は元軍隊のひとだった。地雷インタビューをしていて共通して分かったことがあった。それは地雷を踏んだのは自分のせい、『失敗した』と思うところ。決して他の人のせいにしない。ただ自分を責めている様子だった。本当かどうかは定かではないけれども。地雷があるとはわかっているでも生活をするために地雷があるジャングルへ行かなければならない。これがカンボジアの農村部に住む人々の実態であった。簡単なことではないけれど一刻も早く全ての地雷を撤去されることを願うばかりであった。

この日LiLiでの夕食は一番おいしかった!!!日本人向けの味だった。チャーハンがとてもおいしかった。

3日目ー11日(水) 待ちに待ったトンレサップ湖クルーズ。船で水上村へいきカヌーで水上村を見学。ここは本当に異世界。全てが新鮮だった。再び船に乗り湖へ出た。海のように広がっていた。感動した。トンレサップ湖クルーズをしているときは時間がかなりゆっくり進んでいるように感じた。カンボジアの自然は日本と規模が違う。今は戦後15年のカンボジア。20年30年すれば今の日本のように発展していくかもしれない。しかし私はこのまま自然豊かな国であってほしい。



そして私が一番感動しただるま愛育園。バスで孤児院の前に到着した。すると子どもたちがバスまで走ってきてくれた。その時は何だかよくわからなかった。とりあえずバスを降りてみると、子どもたちが『ねえさん、ねえさん』と手をつないできた。その時はわけもわからず、すごく元気な子どもたちだなど、折り紙したり縄跳びしたりたくさん遊びを一緒にしていた。その子どもたちには親がないということなんて忘れていた。何時間か遊んだ後、私たちは孤児院のお母さんであるソリカさんのお話を聞いた。孤児院に着いた時から、子どもたちの元気に圧倒されながらただただ無邪気に遊んでいたあのお話だったからか話の内容が信じられなかった。すごく胸が



痛くなった。どんな思いで私たちと遊んでいるのか、お母さんのことを思い出しているのか、とかすごい気になった。あの笑顔の裏にはこんなにも悲惨な過去があるなんて感じさせない笑顔だったから。孤児院の子どもたちが作ってくれた日本料理を食べた。日本の味ですごくおいし

かった。すると子どもたちみんながステージの上でカンボジアの踊りをみせてくれた。最後は私たちも一緒に。わからない踊りを一緒に踊った。子どもたちはみんなきらきらした笑顔で大きな声で歌を歌いながら。その時私は涙をこらえきれなかった。なんでこんなに笑っていられるのだろう・・・そのあととはなぜか輪になっていた。すると、「世界に一つだけの花」を歌い始めた。もう泣いて笑って歌うしかなかった。最後は「幸せなら手を叩こう」を歌った。みんなが幸せそうだった。歌い終わると『ねえさん』と満面の笑みでハイタッチをしてきた。お別れの時間がだんだんと近づいていた。最後に私たちは子どもたちが作ったお土産を買っていった。そのお金はもちろん子どもたちの学校や生活費として使われる。さあいざお別れ。私には孤児院に着いた瞬間からずっと手を離さなかったミーナちゃんがいた。私が涙を見せた時からかミーナちゃんも元気がなくなってしまった。もうここで泣くのは駄目だと思ってひたすら我慢して笑い続けた。しかしミーナちゃんには笑顔が戻る事がなかった。だから私は最後に手紙を書いて渡した。もちろん日本語で。だからソリカさんにはあとで私が帰ったらこの手紙を日本語からクメール語に訳してミーナちゃんに伝えてくださいとお願いした。そのあともずっと悲しい顔をしていたミーナちゃんだったけど私があげた手紙はずっと最後まで握りしめていてくれた。ごめんね。私が泣いちゃったからかな。つらい思いをさせちゃったかな、と反省した。だからまたミーナちゃんのを笑顔を見に、だるま孤児院に行きたいと思っている。

夜はホテルの目の前にあるナイトマーケットでマッサージやお土産を見て観光をした。ホテルの立地はとてもよく勉強はもちろん観光も十分に楽しむことができた。

4日目ー12日（木）スタディツアー最終日。この日は一日観光ということで午前中から遺跡巡りをした。順番にアンコール・トム、タ・プロム、アンコールワットへ行った。やっぱり観光地だけある。ひとがたくさんいた。もちろん現地の人もたくさんいた。その中でも目立ったのはオレンジ色のシャツを着た現地のガイドさんたちだった。観光客の需要に合わせて、英語、フランス語、スペイン語、韓国語、中国語、日本語を喋れるガイドさんがいるそうだ。ポルポト政権の頃にあらゆる知識人が殺されたという暗い過去があるというのにカンボジアの人々は必死に語学を学び第二言語を身につけて仕事にしている。私たちのガイドさんだったアンさんも日本語がとても上手だった。あまりにも上手だったので私は『日本に留学したことあるのですか』と質問した。しかし、アンさんは一度も行ったことはない、とても日本に行ってみたくないと答えた。NHKを見たりして、2年間で結構喋れるようになったらしい。カンボジア人には本当に尊敬ばかりだった。やさしくて、何に対しても熱心で、笑顔が素敵で。日本人は何かを忘れてるように思えた。そんなことを教えてくれたカンボジア人との交流だった。



遺跡の出口付近には現地の子どもがたくさんいる。手作りのミサンガや楽器、その他雑貨を持った子どもたち。それらを私たちに売ってくるのであった。最初は断って通っていたものの、助けを求めているような顔をして『1ドル』と言い続ける子どもたちを無視できなくて、だんだんと心が痛くなり断り切れずに一人の子に1ドルを渡してしまっ。その子は手を合わせて私にお礼を言って去って行った。と思ったら私たちの周りには10人以上の子どもたちがバッと集まっていた。本当に心が痛んだ。あんなにも小さな子どもたちが必死にお金を集めて生活をしているなんて考えたら。学校に行くために、家族を支えるために必死だった。私はその時こう思った。一人の力じゃ何もできないんだと。私がたった一人の子に1ドルを渡しても何も変わらない

のだと。どうしてもなくて何もできなくて
つらかった。このときみんなで集める募金の
力の大きさが感じられた。みんなで少しのお
金だけど募金して集まった大きなお金で、や
っと困っている人を救えるのだと。カンボジ
アへ行く前は募金なんて力にならないとか、
これで本当に困っている人が助かるのかとか
思っていたが、ここにきてやっと募金の意味
を知ることができた。そのお金があの子たち
のため、笑顔の源になることを願うばかりだ
った。



さて、スタディツアー終盤。最後のシエムリアップ散策。やはり都市に住む人と農
村に住む人の体つきや表情は違う。地域間格差とはまさにこのことか。とかおもいな
がらシエムリアップ市内を歩きまわる。いつの間にか今回のカンボジアメンバーとも
仲良くなっていた。最後の夜ご飯。日本でいう鍋料理を楽しんだ。最後にはとんでも
ないでかいヤモリ？を見ることができた。初日の不安なんて何もなかった。ヤモリを
見ても大丈夫な自分がいた。そして空港へ向かうバスの中では全体の振り返りをした。
一人ずつ感想を言った。ただただ言えることは涙あり笑いありのカンボジアだったと
いうこと。今回のスタディツアーで出会った全ての人に感謝します。ありがとうございました。